

ゆれながら伸びゆく者

山崎 滋夫

不^{こず}来^{かた}方のお城の草に寝ころびて 空に吸はれし 十五の心

中学三年生のとき、僕たちは担任の先生の提案で、石川啄木の詩を毎日一首ずつふしをつけて歌った。そのときに憶えた数十首のうちのひとつがこの歌だ。きっと自分と同一年の心をよんだ歌だったからに違いない。何かつらいことがあったのか、沈んだ思いで服のボタンをゆるめ、城あとの草に寝て大きく息をはいている小柄な少年の姿が浮かぶ。およそ百年も前の歌だが、十五歳の心は今も昔も、なぜ何を求めてゆれ動くのだろう。

一 生命力のほとばしり

少年の心は急な谷川を流れくだる水に似ている。

上流の若い川の水は急流をなして峻^{けね}しい谷の壁を削り、大雨のときには川岸を突き破ってあふれ、流路を変えては人を驚かせる。人間も十三から十五、六歳のころにかけては、心身ともにいちばん変化の激しい流れのさなかにある時だから、生命の躍動、成長のエネルギーがひときわ大きい。しかもその生命のエネルギーをコントロールできるだけの、「経験」という堤防

がまだ築かれていないから、時には、自分の説明のつかない心の氾濫も起こりやすい。

この若さのエネルギーは、それが日ごろの学習はもとより、スポーツや文化活動、まわりの人たちのために向けられていくことによって、君たちを眼をみはるような大河に育てていく。それは大人になってからではなく、少年のころにだけ与えられた、羨ましい、野生にみちた成長の力である。君たちはみな、それを秘めている。

二 悩みや疑問との出会い

幼い子どもたちには、「生きる」ことや「自分」についての悩みや自覚がない。君たちが悩みや疑問を持つことは大人に近づいている証拠だし、何かに悩んでいる時は、大きくジャンプしようとして体を縮め、力をためている瞬間なのだと思う。

自分の性格や身体のこと、成績や進路、友人や家庭のことなど本当に様々なことに僕も悩んだ。二十歳を過ぎても続いた。

よくよく考えてみると、授業で学ぶことには、ひと通りの解答や解答法がついているし、教科書もある。先生も教えてくれる。だが自分の心に生じた悩みとか疑問にはそれが無い。だからこそ、それが解けた時、私たちには人間として生きる力が身につくのではないか。人間は考える生き物だから、生きていく限りいつも悩みや迷いからは逃れることはできない。それなら、

「悩み」は逃げ出す相手ではなく、自分の成長のために自分で作る問題集なのだと考えたらどうか。少年に最も似合わないのは、悩むべきことに無関心、鈍感で、「何も悩んでいません」などと利口ぶることだと思う。

悩みは成長の友たちである。まじめにつき合う価値がある。

三 自分の「生き方」への関心

誕生してから死ぬまでの間に、人間ほど成長をとげる生きものはいない。考え出したことや創りだした物を伝え、積み重ねて文化をつくり、歴史を作ることができるのも人間だけである。それは、人間だけが「自分はどうか生きるか」を考え、選択し、実行する能力を与えられているからだと思う。そして、その能力が目ざめ、動きはじめるのが、君たち中学生のころなのだ。

生き方のモデルはいくつもある。自分の両親だったり、あこがれのスターやスポーツ選手や歴史上の偉人であったり、架空の人物や身近な人であったりする。すばらしいと思いい、ああなりたいと思う人はすべて君のモデルとなる。

だが、自分のモデルや目標は見つけても、果たして自分もそうになれるかどうか。自分やまわりの現実が見えてくるほど、可能性を疑う気持ちも同時にめばえてくる。そして、「実現できない事は早くあきらめよう」という声が聞こえたりして将来に向かっただけの気持ちがゆるぐ。

そんな時は、人生の先輩たちの体験を聞くのが一番よい。それぞれ自分が通ってきた道をふり返りながら、君たちが志をかためるヒントを与えてくれるだろう。

また、どんなにすぐれたモデルであっても、人間は強く、気高く生きている一方で、弱く、みにくい面も必ず合わせて持っている。相反する二つの面の入りみだれるありさまが、その人の人柄や生き方を作っていると考えてもよい。だから生き方のモデルをよく見つめるとともに、自分の中にどんな強さや弱さがあるのか、内面の自分と語り始めてほしい。さらに、他人から見た自分はどんな人間なのか、心を聞いてまわりの声を聞いてみれば、意外な自分が見えるかもしれないし、子どもっぽい自己中心性（ジコチュウ）を卒業できるかもしれない。

四 失敗との対面

たとえばサッカーの練習では何度かシュートを失敗しても、まわりの人はだまって見ているのに、授業での答えを間違うと冷やかす、からかうことがある。スポーツのけいこも教科の学習も同じ「練習」であり、間違いと失敗をあたりまえとしておこなうはずなのに、なぜ態度が違うのだろう。他人の間違いや失敗を笑う心の裏側には、競う相手を見くだし、優越を感じてほっとしている自分がいるのではないか。笑われたい人間はいない。だから笑ってはならない。失敗とか間違いは、成功するために絶対に必要な大事なことだし、練習・けいこ・実験・学

習はすべて失敗と反省のくり返しでもある。このくり返しを重ねて、私たちは自分の力を高め、ていくのであって、その歩みと結果が君たちの人生を左右する。そもそも中学生の生活全体が、大きな練習の舞台なのだ。

少年のころは、自分への誇りが芽生え、他人の眼が気になる時だから、失敗を恥じる。まわりが笑い、冷やかせば、なおはずかしくて、やる気が失せていく。それは、仲間の成長のエネルギーを奪うことでもある。

失敗には、それをくり返すまいとすることで成功に近づくという大きな価値があることを知ってほしい。何かをしきじった時は、胸をはる必要はないが、小さくなる必要もない。反省と修正をすればよい。

五 ものに感動する柔らかさ

すばらしい曲を聞いたり美しい光景にふれたり、嬉しい出会いをした時、私たちの心はそれに反応して弾む。それを感動という。自分に出来なかったことが、やっとできた時も、感動する。

少年の心がゆれ動くのはこの感動のためでもある。これは、何かが頭でわかるとか、知るというチャンネルではなく、出会ったものごとのよさを瞬間のうちに心のアンテナで感じ、じかにひとつにとけ合うということであって、そのために必要な心の柔らかさを君たちは豊かに持っている。

宗教や芸術など人類の文化の多くは、頭で考え出したというより感動する心が創り育てた財産だと思う。より美しいもの、気高いもの、いのちや出会いの不思議、宇宙や自然、人間社会の成り立ちなど、「わかる」というより「感じとる」べき価値がいかに多いことか。いま君の心が柔らかなうちに、ひとつでも多くの感動に心をゆすられるチャンスを求めてほしい。

六 依存から自律への脱皮

赤ん坊のころは、心も体も両親やそれに代わる人たちの世話をうけ、見守られて大きくなる。小学生のころになると自分で考え、できることが増えるから、まわりの人に教えられ、見習いながら自分の行動をするようになる。中学生になれば、まわりの大人たちの言葉や考え方を批判できるようになり、言われるままに行動することがうるさくて厭いやになることもあるし、さからってみたくもなる。

この変化こそが、これまで親の保護や援助に守られ、支えられ、「依存」した子どもから、自分の意志と判断で行動する「自律」した若者への脱皮のしるしである。そのようすは、翼は大きくなったものの、まだ自分で餌を獲ることはできず、巣の上でしきりに羽ばたきをくり返

す若鳥に似ている。

やがて巣立つ時が来るが、いまは、与えられた餌をしっかりと噛んで羽ばたきを鍛え、飛び立つ森と大空をよく見渡しておくことだ。高く遠く飛びたいと思うなら、あわてて飛ぶな。

七 自分の責任との向きあい

一人前の大人の条件のひとつは、自分がしたこと、言ったことに責任をとるということである。私たちは社会の一員であるから、自分のすることが自分自身やまわりの人たちにどんな結果をもたらすかを考えて行動しなければ、お互いに迷惑や不愉快さ、損害をかけ合う世の中を作り出すことになる。「無責任」は住みにくさこの種であり、学校や学級にも広がりやすい。

中学生は子どもから大人への脱皮の時である。脱ぎ捨てなければならない幼虫の皮は、わがまま、不作法、ルール無視……特に、自分がこうなったのは親のせい、社会が悪いなどという幼稚な責任のがれと開き直りだと思う。君たちが大人になるころは、今よりも「自分の責任で生きる社会」へと向かうに違いない。他者に甘えて生きる者には厳しい世の中が待ち受けていることも、考えに入れておく方がよい。君たちはもう「子どもだから」で許される齢ではない。

八 友だちとの関係

友だちの言葉や態度つまり友だちが自分をどう見ているかは、誰でも気になることだが、中学生のころはとくに敏感になる。これまで全面的に頼っていた両親や先生方との関係が少しずつ整理されていく分だけ、対等に心の通いあう仲間の存在が大きくなる。成長のしるしだが、時にはつきあう友だちに無視されたり仲間はずれになることを恐れて、言いたいことが言えなかったり、したくないことをやってしまったりもする。

ともかく仲間との関係は、君たちの心をゆらす大きな要因に違いない。真の友人は、お金などにかえられない生涯の宝だから、友情は大切に育てなくてはならないが、自分の本来の姿を曲げてつきあうことでは育たない。一方が我慢や損をして、片方が得をするようでも、すぐ終わりがくる。

友だちのつくり方などというテキストはないが、伸び伸びと競い、高め、助けあう友を得れば、君たちの成長は互いに数倍豊かになるだろう。書き忘れていたが、よい書物もまた、よき生涯の友とすることができる。

九 理想と可能性への疑い

高校を卒業する時、校長先生が僕に書いてくれたのは「失望は罪悪である」という言葉だっ

た。考えてみれば、人は重い病気やけが、災難、貧しさなど、どんなに苦しくてつらいことがあっても、ひとすじの望みがあれば耐えられるし、一切の希望が断たれた時には死をも考える。言いかえれば、夢とか望みというものは、心が生きぬくために最も大切な糧、エネルギー源なのだ。そうでなくても、少年にとっては、夢や望み、自分がこうありたいという「理想」をもつことは大人になるためのエネルギーであり、それぞれの成長のゆくえを決める羅針盤でもある。だから自分の理想を抱いている若者は強く、まっすぐな生き方をする。

しかし夢や理想は実現できるかどうか分からないし、失望に終わるかもしれないという不安もある。だが、それが分からないからこそ「夢」なのであって、実現できると分かっているものは、ただの「めやす」にすぎない。めやすには、心をかき立てる力がない。

自分の可能性を信じて、ひたむきに理想を追う姿が、少年には一番よく似合う。失望は罪悪に近いと、今でも思っている。

十 熱中するものの発見

大変な釣り好きの中学生がいた。休日はもちろん、遠足にも修学旅行にも釣り竿を持ってきた。大学に入ってからは日本中の溪谷をめぐって魚を釣り、その体型や餌を調べ、生態の分布を整理して、教授を驚かす論文を残した。熱中することを追いつづけ、それを学問としてやり

とげた彼に、私は拍手した。

教科で学ぶことはもとより、スポーツ・読書・趣味や創作など、何かに夢中でうちこめるものがあるというのはすばらしい。熱中することとは真剣であることと同じことであり、それをやるのが苦にならずに続くから必ず上達する。ことわざに「好きこそもの上手なれ」というのはそのことをいう。何かに上達しようと思うなら、そのことを好きにならなくてはならないという意味でもある。

本気で打ち込めるもの、熱中できるものを見つけるのはむずかしいと思うかもしれないが、今やっていることをちょっといいねいにやってみたり、興味のある活動のチャンスを見逃さず、しりごみさえしなければどこにでもある。そして見つけたことを続けていけば、いつか本物になるということだ。それが君の一生の仕事や楽しみになるかもしれない。個性が輝く生き方はこのような人生のことをいう。